

『ブレンダ・スター』・『ワンダー・ウーマン』——女性文化の模索期としての1940年代アメリカ

中垣 恒太郎

1930年から1951年までの期間は、「アメリカン・コミックスの黄金時代」と称される。とりわけ第二次世界大戦中、コミックスは安価で人気のある娯楽であった。子供向け、男性向けとしての趣が強いこの時代のアメリカン・コミックスの中で、女性向けコミックス、コミックス作家はどのような位置にあったのであろうか。1940年代初頭に登場した『ブレンダ・スター』、『ワンダー・ウーマン』という女性を主人公にした2つの代表的作品を中心に、1940年代のアメリカン・コミックス事情を女性文化の観点から展望してみたい。

『**女性による最初の新聞連載マンガ**』『**ブレンダ・スター**』と**デイル・メシク(1906-2005)**
デイル・メシク(本名ダリア)はシカゴの美術学校で学んだ後、挨拶状を作る会社で働いてある程度の成功をおさめていたが、不況期のおりからニューヨークの会社に移る。その際にコミックスの収集をはじめ、1940年に『ブレンダ・スター』で『シカゴ・トリビューン』紙日本版に初登場(45年から日刊連載)したことにより、新聞連載マンガで成功した最初のアメリカ女性作家に位置づけられている。メシク以前にも「コミックスの女王」と称された、ネル・プリングリィ(1886-1944)やエドウィン・ダム(1893-1990)ら女性作家の活躍はあったが、まだ女性作家に対する偏見は強い時代であり、とりわけ新聞連載マンガの領域では、女性作家による、女性を主人公にした『ブレンダ・スター』の登場は画期的なものであった。実際に連載が決定するまでに『シカゴ・トリビューン』の編集長からは頑強な抵抗があったという。ヒロインのブレンダ・スターは『フラッシュ』紙の女性記者で、ニュース記者として活躍する。彼女自身は謎の恋人バジルを追い求めている一方で、他の男性登場人物の恋の標的になっている。冒険物語とロマンスの要素を組み合わせた作品は、男性、女性の読者からも受け入れられ、大人気となった。

時代が大きく変遷していく中でも、ブレンダ・スターはファッションやヘア・スタイルなど常に「現代的」であり続けていく。作者であるメシクが製作から離れる前に、ブレンダは遂に永遠の恋人バジルと結婚し、二人の間に女の子が生まれるという展開をたどっている。1980年にメシクが『ブレンダ・スター』の製作からおりて以後は、ラモナ・フレイドン、リンダ・サッター(Linda Sutter)とジューン・ブリグマン、メアリー・シュミック(Mary Schmich)ら女性作家により現在まで描き継がれている。メシクから後の作家に引き継がれて以降の展開として、ブレンダはバジルと離婚、さらにブレンダは記者から編集者に出世を遂げている。

『ブレンダ・スター』は1945年、1975年のテレビ映画版に加え、1989年にも映画版が作られており、その人気の長さを示している。1989年の

映画版では、コミックス作家がブレンダ・スターを描き上げ、色づけを終えると同時にブレンダ・スターが生命を持ちはじめ、コミックスの世界から飛び出して行動を開始するというファンタジー活劇になっている。

『**フェミニストの先駆——『ワンダー・ウーマン』**』
『ワンダー・ウーマン』はウィリアム・マーストン(William Marston,1983-1947)原作によるDCコミックスのスーパーヒーローものの女性版で『オール・スター・コミックス』第8号(1941年12月)が初出。『スーパーマン』、『バッド・マン』に続く人気を誇る。原作者のマーストンは心理学者であり、後の「ウソ発見器」につながる血圧装置の研究と発明でも有名で、『ワンダー・ウーマン』は、「女性は男性よりも正直である」など、マーストンによる女性の心理研究の成果をコミックスの形で提起しようとした試みでもある。そのために男性作家による作品でありながら、フェミニズムの先駆的試みとして『ワンダー・ウーマン』は位置づけられることが多い。ワンダー・ウーマンの活躍を通して、犯罪を罰するよりも犯罪者の更生に力点が置かれている点、悪者に対しても力でねじ伏せるのは最後の手段としている点に特色がある。マースンは戦争により、男性が前線に送られることで女性の社会進出が進むことを見越していた。その一方で『ワンダー・ウーマン』は背後に込められた性的な要素により、男性読者を多く獲得したとも言われている。心理学者でもあったマースンは男性読者に受ける必要性も意識しており、縛られている場面が扇情的に描かれるなど、フロイトのいう「性的な想像力」を意図的に作品に導入している。

『ワンダー・ウーマン』の主人公はアマゾンの女系部族の王女として育った後、アメリカに渡る。超人的な能力、スタミナを持ち、動物とコミュニケーションをとる能力も兼ね備えている。作者のマーストンによれば、愛、平和、そして男女平等の理想を追求するフェミニストのロール・モデルとして造形されており、知的で、美しく、かつ柔らかく暖かい側面も持ち合わせた女性の理想を体現した存在である。もともとの物語では、アメリカ兵士トレヴァーがパラダイス島で飛行機事故を起こし、その際に介護してくれたのが島に住むダイアナ王女であった。トレヴァーと恋に落ちたダイアナは島を離れ、アメリカに渡り「ワンダー・ウーマン」として秘かに活動することを選ぶ。ダイアナはナースとしてトレヴァーを手助けするために戦時部局に勤めることになる。トレヴァーは、ダイアナが実はワンダー・ウーマンであることを知らないでいるが、2人が同一人物ではないか、と疑っている。1943年からは「女性性のための戦い」という副題も付されたが、ワンダー・ウーマンはアメリカのために戦う女性であり、中でも男性中心的で保守的な価値観が支配するアメリカにおいて、「アメ

リカの女性のために」戦う女性の役割を果たした。

1947年に原作者のマースンが死去して以後、ロバート・キャニガー(Robert Kanigher)が『ワンダー・ウーマン』の製作を引き継ぐが、フェミニストの先駆者としての側面が弱くなってしまい、従来のヒロイン像と似通ってしまった。1940年代後半から1950年代前半にかけて、コミックスの流行が少年非行の温床、学力低下や悪影響につながることを懸念する世論が高まり、「コミックス・コード」と呼ばれる規制が強まっていく。スーパーヒーローものの根底にサディズムと同性愛嗜好があると指摘した、精神科医フレデリック・ワーザム『無垢な者への誘惑』(1954)が火付け役となり、PTAや政治家主導によるコミックス規制の動きは出版禁止運動や焚書にまでエスカレートする。『ワンダー・ウーマン』もワーザムの檜玉にあげられており、ワンダー・ウーマンと彼女の周辺の女性たちの間にレズビアンを思わせる関係があると非難されたことで旗色が悪くなった。すでに原作者も死去してしまっており、戦後に保守化が進んだ時代思潮の中で、ワンダー・ウーマンのフェミニストとしての先見性は弱められてしまう。第二次大戦中に男性が戦場に向かっていたために空いていたポストを女性が埋め、1940年当時の女性は社会の中で重要な役割を果たし、経済的自立をつかみかけていた。『ブレンダ・スター』と『ワンダー・ウーマン』がほぼ同じ時代に登場したのも必然的であったと言える。しかしながら、戦争から帰還してきた男性たちは女性を再び家庭に押しとどめようという動きを示す。女性の社会進出により、自分たちのポストが女性に奪われるのではないか、という恐怖が反動としてあられ、『ワンダー・ウーマン』も変容を余儀なくされる。その後も作品は継続していたもののしばらく停滞期が続く。スピンオフとしての『ワンダー・ガール』をもたらすなど『ワンダー・ウーマン』が再び活気づくのは1950年代後半から60年代にかけてであり、さらに1970年代のフェミニズム運動の中で再評価され、1975年からはじまるTVシリーズ(-79)などの映像版は『ワンダー・ウーマン』の知名度と大衆性を一気に押し上げた。2009年にはアニメ版も発表されている。

『女性文化の模索期としての1940年代アメリカン・コミックス事情

一般にアメリカは少女コミックス文化の発達が、ヨーロッパと比しても目に見える形で現れにくかったといわれているが、『ブレンダ・スター』、『ワンダー・ウーマン』以外の作品に目を向けてみると、女性主人公(特に女の子)の物語として、新聞マンガ『孤児アニー』(1924開始、ミュージカル版『アニー』[1977])や、いたずら好きの女の子を主人公にした『リトル・ルル』(1945)などが挙げられる。また、『ワンダー・ウーマン』の成功後、『キャプテン・マーヴル』(1941-53)の女性版『メアリー・マーヴル』(1945)や、『スーパーマン』の従妹としてスーパー・ガールが1959年に登場し、1972年からは『スーパー・ガール』として物語の主人公となる。70年代以降は、『スパイダー・ウーマン』(1978)、『ミス・マーヴル』などフェミニズムの時代を反映し、アメリカン・コミックスの女性版が多く現れる。

1940年代には「ジャングルの女王」とでも称すべき物語群の流行が

あった。たとえば、『シーナ——ジャングルの女王』(1938登場、1942年から独自の題名作品に)はヒョウの毛皮を着た金髪的女ターザンが主人公であり、女性の読者層を狙いとしつつ、セクシーさを強調することによって10代の男の子の興味をもひきつけた。ジャングルの「未開」文化、「野生」の人々の生活などは偏見に満ちた、典型的なステレオタイプに基づくものであるが、1940年代から50年代にかけて類似の物語がたくさん出され、人気を集めている。また、女性読者、中でも低年齢層の女の子読者層に向けた出版市場の拡大を狙った動きも1940年代初めにかけて現れており、コミックスと雑誌とを混ぜ合わせた『女の子たちみんなに呼びかけよう』(*Calling All Girls*、現在も刊行中のティーン向け雑誌YMの前身)などの試みもある。ナースや歴史上のヒロインの物語をコミックスの形で提示し、道徳的なロール・モデルを提示するという保守的なものであるが、アメリカにおける少女向け文化の模索期を象徴した産物であろう。もう少し上の年齢層を狙ったものとしては、「ティーン・コミックス」として後に定着するジャンルの先駆的存在となる『アーチャー』が挙げられる。アメリカの典型的な男子高校生アーチャー・アンドリュースを主人公にした学園青春コミックスであるが、1941年に初登場して以後、アーチャーを取り巻く女の子たちの物語がスピンオフとして人気を集める。中でもアーチャーをめぐる恋愛のライバル、『ベティとヴェロニカ』(*Betty and Veronica*, 1950)は黒髪と金髪の2人の思春期の女の子に焦点を当てており、同時代の女の子たちのファッション文化を積極的に取り入れている。さらに1940年代半ばから『ミス・アメリカ・マガジン』(*Miss America Magazine*)、『ティーン・コミックス』(*Teen Comics*)、『ガールズ・ライフ』(*Girl's Life*)などの少女向けコミック雑誌が登場し、スーパー・ヒロインものの『ミス・アメリカ』や『パツィー・ウォーカー』(ルース・アトキンソン)などが活躍した。他にもヒルダ・テリー『ティーナ』(1941-66)、マーティ・リンクス『ポビー・ソックス』など少女向けティーン・コミックスが誕生している。

ハイティーンから大人向けの女性コミックスとしての「ロマンス・コミックス」のジャンルに関しても、恋愛、不義、そして復讐までをもテーマに据えている『ヤング・ロマンス』(1947)などその萌芽を1940年代後半に見出すことができる。ロマンス・コミックスは1950年代になるとコミックスの規制の動きにより、不道徳さや宗教上の観点から統制を受け、さらに1960年代後半から70年代にかけてフェミニズム運動により女性の権利・意識が向上するにつれて、古い恋愛観、男女間にとらわれていることが批判されることになるが、「ロマンス・コミックス」の起源を『ブレンダ・スター』、『ワンダー・ウーマン』が登場する1940年代に求めることができる事実は興味深い。

アメリカ大衆文化にとって1940年代は保守的な時代であり、とりわけ若者文化に関しては目ばしい動きはなかったとみなされることが多いが、『ブレンダ・スター』、『ワンダー・ウーマン』を軸にコミックスにおける女性の姿に目を向けてみると、『ティーン・コミックス』や「ロマンス・コミックス」のジャンルの萌芽、少女文化への模索をこの時代に見出すことができる。

^[1] コミックスを描く女性たちアメリカの女性アーティストたちの100年